

HEARTful

笑顔と心をつなぐネットワーク

はーとふる

2020年
春号

■特集

私たちは、 子どもたちのために 何ができますか？

｜新連載｜

環境問題を考える 地球の未来を守るのは私たち！

｜連載｜

われら明社人 明るい社会づくり運動北九州地区協議会
被災地レポート 「はやまのふもと」(宮城県唐桑町)





全国を結ぶ ネットワークの力を 発揮しましょう

2007年から私は全国明社の役員を務めさせていただきましたが、まもなくその任期も終わることになります。この間に各地の皆様には本当にお世話になり多くを学ばせていただきました。心より御礼申し上げます。

2007年当時は、法人組織が内閣府から東京都認証に移行し組織の形を変えた直後で、全国明社と各地の地区明社との関係にあちこちで軋みが出ていました。そこで理事会では全国明社のミッションを見直し、まずは地区明社の活動を支援すること及びこの運動の理念を堅持し推進することとしました。そして全国と各地の明社は上下の関係ではなく、全国明社が各地の明社の情報のハブとなり全国の活動を促進することを確認しました。ピラミッド型からネットワーク型組織へと大きな変容を遂げるようになりました。しかしながら、言葉による説明だけでは具体的なイメージが持ちにくかったと思われる。図らずもそれが目に見えてわかったのが東日本大震災でした。

震災の翌日から全国明社事務局では、被災地の地区明社に連絡を取ろうとしました。ようやく仙台明社と連絡がついて、被災直後の夕食から避難所の炊き



榎 ひさ恵

特定非営利活動法人明るい社会づくり運動 監事

出しを始め、被災者の支援に必死の石巻の様子がわかりました。事務局には被災地以外の地区明社からの電話が鳴りやまなかったそうです。

宅配便が送れるようになり、避難所に下着の替えをという現地の要望を、全国明社から各地に発信しました。事務局が配慮して、シャツ・パンツ・靴下のセットにして、男女別、子ども用などに分け、箱の外に数を明示して石巻明社に送るようお願いをしました。ひと月足らずで5千セットが集まり、さらに延長して約1万セットを全国の明社の力を結集してお届けすることができ、本当に喜ばれました。

全国に約500の組織があるといわれますが、日頃から何かあればすぐに動ける態勢でいる地区明社の皆さまの力が集まってこんなすごいことが起きたのです。明るい社会づくり運動の全国ネットワークがまさに機能したわけです。

この全国ネットワークを通して、それぞれの地で多様な取り組みをされている皆様の内から湧き上がる力が、信頼と思いやりで結ばれ心豊かに暮らせる社会づくりにますます貢献されますことを祈念いたします。ありがとうございました。

耀メッセージ

1……特集 私たちは、子どもたちのために何ができますか？

8……環境問題を考える——地球の未来を守るのは私たち！

10……われら明社人

13……被災地レポート

14……Palネット

16……全国清掃キャンペーン

掲示板

耀！連隊 明社レンジャー

Contents

はーとふる2020年 春号

【目次】

特集

私たちは、 子どもたちのために 何ができますか？

子どもたちを取り巻く環境は、年々変化しています。特に近年は、虐待、貧困、スマートフォンの普及に伴ういじめなどさまざまな課題が取り沙汰されています。こうした子どもたちを見守り、励まし、支え、時には叱り、教え導くのが大人の務めです。今号では、地域の宝である子どもたちをみんなで育てるために、どのような取り組みができるのか、みなさんと共に考えていきたいと思います。

座談会

子どもを見守るまなざし

参加者

下里 由香さん

聖園女学院高等学校・中学校教頭

小宮 位之さん

認定NPO法人八王子つばめ塾理事長

山中 淑江さん

杉並明るい社会づくりの会事務局総務

司会

菊地 正人

特定非営利活動法人明るい社会づくり運動事務局長

いま、子どもたちは

菊地 きょうはお集りいただきありがとうございます。みなさんからお話をうかがえるのを楽しみにしておりました。それではまず、いま、子どもたちの置かれている環境をどのように捉えられているかお聞きたいと思います。

下里 子どもたちの環境は、インターネット、携帯電話、とりわけSNSの普及で様変わりしましたね。子どもたちの交友関係が見えづらくなりました。友だちのつながりが複雑になり、無限に広がっているのです。親御さんが把握するのは難しくなっているのではないかと思います。

小宮

気の休まる時間がないのではないのでしょうか。昔は、家に電話がかかってきますから、親も誰からかかってきたか分かりましたよね。しかし、いまは子どもの携帯でメールやLINEで直接連絡を取り合っています。クラスでグループLINEを作って連絡を取り合うわけですが、何かあるとそこに書き込まれてしまいます。つねにLINEを見ていないと気が落ち着かず、緊張状態にあるように思います。勉強どころではないのではないのでしょうか。

山中

わが家の孫もLINEが入ってくると、食事中でも携帯を手に入れます。でも、子どもたちの間では、来たらすぐに返事をしないといけな



下里 由香 (しもさと ゆか) さん

ようなふれ合いをして
いけばいいのでしょうか。

下里 いまの生徒たち
を見てみると、自己肯
定感が非常に薄くなっ
てきているように思っ
ます。友だちと比べて
しまうんですね。また、
ちよつとした言葉で傷

いようですね。

小宮 返事をしないと「返事をくれ
ない」とか言われてしまうのですよ。
それで人間関係が悪くなってしまう
のです。仲間の中で孤立してしまう
のが怖いからでしょうね。

下里 デジタルネイティブ（生まれ
たときからデジタル化で育ってきた
こと）の生徒たちとふれ合うために
は、私自身が少し勉強しないといけ
ないと思っています。文部科学省が
ICT教育を推進しているので、生
徒たちはタブレットを持っていて、
操作をあっという間に覚えてしま
います。デジタルネイティブで育っ
てきている特徴ではないでしょうか。
私のように、成長してからインター
ネットと出会った世代とは違います。
菊地 そうしたお子さんとは、どの

ついてしまう傾向があります。そし
て、「自分はだめなんじゃないか」
と……。負のスパイラルにはまっ
てしまふと孤立してしまうという状況
もあります。子どもがそうした気持
ちに陥ってしまったときに、大人が
抜け出せる道を一緒に考え、見つけ
てあげられるふれ合いが必要ですね。
山中 昔はおじいちゃん、おばあち
ゃんと一緒にの生活をしていて、親に
厳しく叱られるとなぐさめてもらっ
たり、甘えたりすることができまし
た。核家族になるとそういう機会が
ないことも残念だと思っています。い
ろんなことを体験させてあげて、背
中を押してあげる人が必要かもしれ
ません。それと、それぞれが自分の
良さを見つけれられるといいと思
います。

小宮 私が主宰している「八王子つ
ばめ塾」は、無料で子どもたちに勉
強を教えています。通ってくる子ど
もたちの三分の一がひとり親家庭で
す。あとは共働き家庭できょうだい
が多いご家庭のお子さんたちです。
これまで400人くらいの子どもを
受け入れていますが、学習習慣のな
いお子さんが多いのです。お母さん
が忙しいので、勉強のことまで気が
回らないのです。「高校に行ってほ
しい」と漠然とは思っていても、具
体的にできない親御さんが多いのが
現状なのです。

山中 無料塾のような場所があるこ
とは、地域にとっても素晴らしいこ
とですよ。大人が子どもに寄り添
ってあげられるところ、子どもが安
心して学べる場所がたくさんあると
いいですよ。

ボランティアを とおして子ども に寄り添う

菊地 先生が隣にすわ
ってくれて、「一緒に
勉強しよう」と言葉を
掛けてくれる……。そ



小宮 位之 (こみや たかゆき) さん

れによって教科書を開いて、学習習
慣を身に付けていく場合は貴重ですね。
小宮 忙しいと寄り添いをつい忘れ
てしまいます。しかも子どもが6人
いたら、一人ひとりに寄り添うだけ
でも大変になってしまうのでしょ
う。そうした子どもたちが前進して
いくために、土台を築いてあげたい
のです。一步を踏み出す力です。寄
り添ってあげられる大人がいること
で、安心して勉強できるのです。だ
から、私は塾にやってくる子どもた
ちに、大きな声で「よく来たね！」「
お疲れさま！」「気をつけて帰って
ね！」と声をかけます。すると、子
どもたちは、「ありがとうございま
す！」と言って帰っていきます。
山中 私は、地域で開催している「子
ども食堂」のボランティアに、月に



山中 淑江 (やまなか よしえ) さん

「だなあ、と思いました。小宮 行く場所があるということが大事なのです。」

山中 私の住んでいる杉並区には、いまは20カ所ほどの「子ども食堂」があります。ところが、その存在を知らない方たちも多いので

1回、お手伝いに行っています。当日は、子どもさんが30人くらい来ます。そのほかにご高齢の方々もおいでになりますね。見てみると、おじいちゃん、おばあちゃんとお孫さんたちが食事をしているようです。

小宮 いいですねえ。多世代がそろって食事することも大事ですよ。

山中 ランドセルを背負ったまま来るお子さんもいるので、迎えるときは「おかえりなさい！」と声を掛けます。子どももうれしいのでしょうか、笑顔を見せてくれます。

下里 「私を見てくれている」「僕を見てくれている」という安心感が活

力につながるのだと思いますね。山中 そして、食事のあとにはボランティアさんが勉強を教えてください。そういうことも本当に大切

です。それで、先日、「杉並明るい社会づくりの会」のメンバーがJR荻窪駅のロータリーに立って、チラシを配ったのです。地域での助け合いに意識を向けています。

小宮 つばめ塾も八王子のコミュニティ誌の企画に毎月、連載されるようになりました。単発の記事だと、その時は「いい活動だな」と思っていただけでも忘れられてしまいます。毎月の連載だと、みなさんの記憶に

留まるのですね。この企画を覚えてくれたのは妻のママ友です。熱心に宣伝、応援してくれるのです。そうした支援もありがたいです。



菊地 正人 (きくち まさと)

子どもたちの居場所づくり

菊地 行く場所があるということは、自分がそこにいいということですよ。

山中 「子ども食堂」の開設は、「貧困家庭」の救済を目的に始めたところも多かったように聞いていますが、「いまだに貧困があるのですね」と思われる方もいます。しかし、現実には、お子さんを育てているシングルマザーはたいへん厳しい生活を送られています。そうした家庭のお子さんは、親御さんが働いていて帰りが遅いので、ワンコイン(500円玉一枚)を与えられてコンビニで自分の好きなものを買って食べています。下里 食事は心と体をつくる源です。

それぞれのご家庭の事情はあるかと思いますが、コンビニのお弁当が続いているのは心配になります。また、お弁当を見ると家庭が見えてきます。ですから、私たち教職者は、なるべく生徒と一緒に弁当を食べるようになっています。ご家庭のことだけではなく、クラスの様子も垣間見ることができずからね。仲間とはずれて一人で食べている子はいないかと……。食事は家族をつなげる大切な時間です、できれば一緒に食卓を囲んでいただきたいですね。

菊地 塾や子ども食堂のような居場所があり、そこで温かく寄り添っていくことが大切ということですね。

小宮 私は、地域のコミュニティの再構築だと思います。都会においては、私が小さい頃に住んでいた都営住宅にも自治会がたくさんありました。それが、最近では無いところがあります。マンションも両隣は挨拶しても、他にはどのような人が住んでいるか分からないから家族構成なんて分かりません。同じ建物に住んでいるというだけで、コミュニティが崩壊しているように思いますね。

山中 私は住宅地の戸建てに住んで

いますが、近所に新しく建った家が数軒あります。小さなお子さんの声が聞こえてきて、ママさんが子育てに奮闘している様子も何となく伝わってくるのです。ですから、道で会ったときは、挨拶を交わし、世間話をするようにしています。ご近所のつながりが大切だと思いますから。

小宮 孤立社会になってしまったなかで、山中さんのようにご近所の方とつながれるというのはいいですね。**菊地** 明るい社会づくり運動も今後、

組織のあり方、活動の内容を見直していく必要があると考えています。自分たちの組織だけではなく、さまざまな組織、団体とつながり合いながら活動を展開していければと思っています。そのためにも、地域の人びととのネットワークを大切にしたいですね。

下里 私どもの学校に隣接して、ベビーホームと子どもの家、老人ホームがあります。そこで働いている卒業生もいます。また、中学生や高校生がお手伝いに訪問することもあります。学生もそうした施設へのボランティアを希望していて、どんどん増えています。

小宮 そのお話の延長のようになり

ますが、つばめ塾のボランティアは、社会人や教職経験者の方たちが仕事帰りに立ち寄り、勉強をみてくれているのです。当初は、小さな組織で私が一人で教えれば良いと思っていましたが、多くの方が「ボランティアをしたい」と声を挙げてくださったのです。しかも、子どもたちが一生懸命に問題を解いている姿に感動して、社会のために役立ちたいと喜びをもって取り組んでくださっています。

下里 小宮先生が地域に灯をともしてくださいだったので。一昨年に「明るい社会づくり運動かながわ湘南」が立ち上がり、私もそこで暮らす一人としてメンバーに加えていただきました。そこでは環境問題を掘り下げていきましようということになり、海岸清掃をすることになりました。私はその清掃活動に、ぜひ、学生たちも参加させていただきたいとお願いしました。

山中 ボランティアをしたいという気持ちはいくさんの方がお持ちだということを実感しています。話すだけで興味を持ってくださいますからね。杉並明るい社会づくりの会で独自で子ども食堂をつくらうというこ

とにはなりません、いろいろなボランティア活動の場がたくさんあるので、そうした組織と協力し合うこともよいでしょうね。

下里 盛りつけやお運びなど、中学生、高校生がお手伝いできることがあったらいいですよ。

小宮 いま、ボランティアしたいという高校生も大勢います。高校生が無料塾を作ったところもあります。そうした若い人の可能性で「子ども食堂」が

広がると思います。

山中 活動の場を増やしていくことで、ボランティアをする機会も増えると思います。そういう場所を大人が提供していくのもいいかもしれませんね。大事な視点だということとその子たちに教えてもらいました。

菊地 地域性や団体の性質を考えながら進んでいきたいですね。

山中 情報を得ると、「自分たちもしてみようかな」と思われる方

もいますよね。明るい社会づくり運動の活動は、柔かく対応していますね。

菊地 地域によって問題点が違うと思いますが、情報を交換し合いながら、社会に貢献できる場をつくっていったら「明るい社会」を築けるのではないですね。本日はありがとうございます。



(左から) 菊地事務局長、山中さん、下里さん、小宮さん

子どもたちのために、

できることを、できる人が、

できることから

社会活動家・東京大学特任教授

湯浅 誠



「子どもの貧困」問題

「子どもの貧困」がクローズアップされるようになりましたが、現代の日本に「貧困なんてあるのだろうか」と思われる方が大半ではないでしょうか。それは、「貧困」という言葉からアフリカの難民キャンプの子どもの姿をイメージされるからだと思います。

しかし、いまの日本でいう「貧困」とは、おおむね教育援助制度（就学援助）基準と同レベルです。

給食費を払うことに苦労しているとか、修学旅行にみんなと一緒にいくことができないとか、あるいはユニフォーム代や遠征費が払えないために部活動を控えてはいけなかったことです。

現在、この就学援助を受けている子は全国に15%いて、東京23区は25%です。貧困の基準に入っている子どもというのは、ほぼすべての学校にいます。そうした子どもたちの支援として「子ども食堂」や「無料塾」が開設されたことは注目すべきことなのです。

子どもたちを取り巻く環境は外からは見えづらく、何が起きているのかわかりません。何かしら対策をとらないといけないわけですが、ただ見まわるだけでは気づくことはできないのです。しかも、問題のあるご家庭は、行政の窓口にもで相談においでになるということとはなかなかないからです。しかし、「子ども食堂」では、さまざまな立場の方たちが運営スタッフとしてかかわっています。毎回、参加する子どもさんとのふれあいのなかで、「この子は少し心配だな」と感じれば声を掛けることなどができます。とはいっても、子ども食堂の運営者は、地域の一住民であり、特別な情報を持っているわけではありません。それでも「自分たちに何ができるか」を考えながら取り組まれています。できることを、できる人が、できることから動き始めているのです。

例えば、保健師さんが地域を巡回するついでに顔を出してくれるとか、民生委員さんが一緒に食事をしてくれることで、スタッフも「何かあったら、この人に相談すればいいんだ」と、運営をおしつてつながりを見つけることができる場なのです。こうした関わりがなかで、子どもを継続して見守っていただくことが大事なのだと思います。

みんなで見守る

また「子ども食堂」は、単に貧困の子どもの対象にした取り組みではなく、地域の交流拠点でもあります。

「子ども食堂」は現在、全国に約4,000か所開設されています。その8割が、「貧困家庭の子ども

さんだけではなく、どなたでもどうぞ」というように、親御さんが一緒に来ててもよいし、地域の高齢の方が来られても構わないのです。誰もが利用できるように運営されています。

東京のような大都会は隣人の顔も知らなかったり、地域のつながりが希薄といわれています。地方においては、独り暮らしの方や高齢の方々、そして、人口減少が進んで地域の過疎化が課題となっています。

こうした現状のなかで、人びとが集ったり、かわり合える場所が無くなってきているのです。そして、無くなってみて、初めて人と人とのふれあいや温もりの大切さに気づき、いま、新たなかわりの場を作りはじめています。その最たるものが「子ども食堂」で、多世代の交流の場として注目されているのです。

おじいちゃん、おばあちゃん、そして地域の人たちが子どもと一緒に食事をする——そんなゆるやかな関係のなかで子どもを見守っていきける場が広がっていくことを願っています。

ゆあさ まこと

1969年東京都生まれ。1990年代よりホームレス支援等に従事し、2009年から足掛け3年間内閣府参与に就任。現在、東京大学先端科学技術研究センター特任教授の他、NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長など。著書に『子どもが増えた！人口増・税収増の自治体経営』（泉房穂氏との共著、光文社新書）、『「なんとかする」子どもの貧困』（角川新書）、『反貧困』（岩波新書、第8回大佛次郎論壇賞、第14回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）など多数。

私たちの取り組み①

「うつくしの森 子ども食堂」

明るい社会づくり運動広島市中区協議会は、「社会に貢献できる事業をしていこう」という永田雅紀会長の言葉で、「子ども食堂」の取り組みが提案されたのが、2016年のことでした。

しかし、話し合いを重ねていくなかで、開設する場所をはじめ資金、食材の調達、茶碗や皿などの備品の準備、運営スタッフの募集情報など、たくさん課題をクリアしていかないといけないことがわかりました。「無理だ」と多くの方に賛同してもらえず、事務局長の木下百合子さんは、時には「心が折れそうになりましたが、『子ども食堂』は、一人からでも安心して過ごせる居場所づくりという思いが強か



ったので、あきらめずに前向きに考えてきました」と、広島市社会福祉協議会主催の「居場所づくり連絡会」に参加し、広島市内で取り組んでいる「子ども食堂」を見学するなど、明社の仲間と共に努力を惜しむことなく準備を進めていったのです。そして、「子ども食堂」が提案されてから2年目の2018年8月28日、廣瀬神社（広島県広島市）の渡部公彦宮司の協力で社務所を借りて開設できることになったのです。以来、毎月1回、開催してきました。1回目は2人の参加者でしたが、そこから伝わっていき、現在、平均30人ほどの子どもたちが集まります。そして、子どもたちが喜んで食事をしている様子を見ることが、スタッフの喜びとなっています。

また、「限られた予算で、おいしい食事を提供するためにはどうしたらよいのか……」と願うスタッフたちを後押しするように、近隣の明るい社会づくり運動のメンバーが、野菜などの食材を提供してくれることが大きな力となっています。最近では、地域の民生委員が参加者の一人として子どもたちと食事を共にしながら、見守ってくれることもあります。「とにかく前に進んでみましょう。子どもたちのため的一步を！」という中区協議会の取り組みが、地域の子どもたちを笑顔にしています。

永田 雅紀さん

広島市中区協議会会長



会議や総会を開催するたびに、「会員さんに明るい社会づくり運動の魅力を高めるために、改善をしていかないといけないですね」というご意見をいただきました。そこで、われわれが、地域社会でどのようなことに貢献できるかということを考えてきました。ちょうどそのころ、「子ども食堂」が社会に知られるようになったときで、「子ども食堂のような取り組みもありますね」と提案させてもらったのです。

当時は、テレビの報道でしか「子ども食堂」について知り得なかったのですが、東京都豊島区の地域でやっていらっしゃる方のお話を聞いたりして勉強しました。ボランティアをしていくことで、多世代の家族との同居がかなわないなかで、高齢の方々とふれあうのはなかなか貴重な時間になると思っていますし、お互いが勉強できる場になっていますね。共に成長できたらいいな、と思っています。

私たちの取り組み②

無料塾「杉並わっか塾」

「門戸は広く、志は高く」を理想に！

「わっか塾」(東京・

杉並区) が開設され

たのは、2018年

春のことです。以前、

塾経営をしていた境

田二也^{かずや}さんが公立中

学校に通う中学生を

対象に学習支援を開

始しました。



経済的にハンディキャップのあるご家庭のお子さんを優先とし、授業料は無料です。現在(2020年3月末日)は、9人が通塾し、ボランティアの講師が協力し合いながら指導に当たっています。

開設にあたっては、「八王子つばめ塾」(東京都)の小宮^{たかゆき}位之先生の運営を参考にし、立ち上げましたが、運営する過程では、講師や事務局スタッフの募集が上手く機能せず、気を揉むことがあったとい



ます。結果、一人で授業や運営をすることもあったといえます。しかし、地道に取り組むなか

で、杉並区内で「子ども食堂」

を運営されている「NPO法人

ゆるゆるma

ma」の小松崎

明子さんをはじめ、塾のある日

に参考書や辞書、

教材などを会場

まで運搬してく

ださる方など地

域の多くの人た

ちがご協力をしてくれるようになりました。



また、新潟県在住の有志からは自身が経営してい

るラーメン店のカップラーメンの差し入れや寄付金

を送金してくれるようになったのです。そんなつな

がりスタッフはもちろん塾生たちも喜び、励みとな

っているといえます。

仕事帰りに子どもたちへ学習指導することについ

て聞くと、「子どもたちとの触れ合いは逆に元気を

もらえます。とはいっても、塾生をお預かりしてい

る以上は、入試で結果を出させてあげなくてはいい

くないと思っています。やりがいを感じています」と

境田さんは穏やかな笑みをうかべました。そして、

今後、「わっか塾」は富士山のようにすそ野を広く、

頂上をめざせるよう、無料塾だけに敷居は低く(無

く)、目指すところはやはり無量に(無限に)取り

組んでいきたいと抱負を語ってくれました。

境田二也^{かずや}さん(塾長)



私は以前、家庭教師や学習塾で生計を立てている時期がありましたが、現在は企業の会社員をしています。「おじいさんになってからもう一度、趣味で子どもたちに教える塾をやってみたい」という気持ちを抱いていました。しかし、おじいさんになる前の私の周囲に次々と協力者が現れたのです。そして、無料で塾を運営している方々がたくさんいらっしゃることを知りました。「八王子つばめ塾」を見学し、小宮先生にお会いして、「本当に無料でできるんだ!」と思いました。それから準備をして、2018年4月から杉並に無料塾を開講しました。子どもたちとのふれあいは、やりがいを持たせてくれます。

